

# 「目」の世界

佐藤 通次

拙著『独和言林』の今後の改訂のために、邦語や漢字の語源の研究を進めてゐるノートの中から、「目」や「見ル」に  
関聯する一群の語を取出してみる。これは筆者の語意論 (Semantik) に属する各個研究の一節である。

いま特に「目の世界」を取り出した所以は、日本語源学の一つの重要な著想である五音相通が、目や見ルに  
関聯する語に、きはめて典型的に現はれてゐるからである。たとへば

目——目之子〔眼〕、目辺〔方〕〔前〕

見ル

目ク〔向く〕、ムカフ〔対ふ・迎ふ〕

目、見ク〔春めくなど〕、見ス〔召す〕

目認〔尋〕ム〔求む〕、目ル〔守る〕

五音相通は悉曇学しつだんの五音相通・同韻相通に触発された著想であると言はれるが、それは印欧語の Ablaut (変音) に対  
応する語彙の内的派生を、音韻の交替として捉へる適切な著眼といふべきであらう。もちろん、日本語の語源は五音相通  
によつて説明し尽されはせず、近世のいはゆる音義音霊派の所説に幾多の非学術的要素が混在してゐることは覆ふべから

ざる事実であるが、音義説ばかりでなく、すべて古人が母国語の語源の解明に取組んで発明した方法論は、各個の語詞の解釈における成果は別として、みな重んずべきもののやうに思はれる。たとへば貝原益軒の『日本釈名』に立てた、和語を解く上の八つの要訣(自語、転語、略語、借語、義語、反語、子語、音語)や、賀茂真淵の『語意考』に説く「延、約、略、転」の四原則などは、考へ方としては、それぞれ卓見であるし、また各個の語源究明の上でも、今日の標準から十分宜<sup>うべ</sup>ひ得る成果を、部分的に挙げてゐるのである。

本稿では「目」や「見ル」に關する一群の邦語の語源を追求しながら、意味の上で対応する漢字や欧語を顧み、同時に、それぞれの場合に顕はれる語源学上の原理論に言及し、併せて、系統を異にする和漢洋の三種の言語の示す、人間のエートスとパトスにも触れてみようと思ふ。それに先だち、語源についての筆者の見解を要説しておく。

言葉にはすべて意味がある。ある語詞——それは外形的には「名」(Name)であるが、名によつて喚起される心的内容を意義(Sinn)といひ、名と意義との相互關係を意味(Bedeutung)と言ふ。この相互關係を成立せしめる場所は人間の意識にはかならぬから、語詞の内容を、そのノエマ面からは意義と、ノエシスに即する面からは意味といふ、と解してよいであらう。

語詞の意味は、一々の具体的な場合に、ある特定の事物を指示するが、それは、一々の場合を超える根源的な意味が、今の場合にある特殊相を以て現はれるものにはかならない。その根源的な意味こそが、その語の「真の意味」(Etymon)、「真なるもの」である故に、語源研究は Etymologie と呼ばれる。根源的な意味は、語詞の変遷のうちに特殊相を示すので、語源論は語詞の——ソスニール(F. de Saussure)のいはゆる——「通時論」的分野において成り立つ。

所与の現実を超えて本源的なるものに迫らうとする態度は、哲学の立場と同質である。ただ哲学が超越的な本源に迫らうとするのに対し、語源論は単に、超越的ならざる、従つていはば同平面上の、本源に返らうとする。よつて語源論は、必然的に、あくまで科学の態度を以て遂行されねばならぬ。

存在の本源に迫らうとする哲学的志向がすべての人に内在するやうに、語詞の本源を把握しようとする語源論的志向も、各人に共通する。かくして学問以前の立場の、いはゆる「故事つけ」が行はれて、民間の「語源俗解」(Volksetymologie)が発生し、たとへばそれが、民族の神話の記録などにも保存されることとなる。たとへば古語拾遺や、旧事記の注で、日本神話の「天の岩戸びらき」に因んで「オモシロシ」を面白シとするときである。古典における地名の由来などには、とくに語源の俗解が多い。

※「オモシロシ」は、学問的語源論からは「思著シ」の転と考へられる(大言海)。齊明紀の歌に「オモシロキ今城いままの中は忘らゆまじ」とあり、悲しい思ひにも用ゐてある。

真正の語源学は、もちろん学術的立場から行はれるものである。西欧の場合には、ローマ時代に、一々の語詞の原義を説くいくつかの文法書が現はれたが、その説明の大部分は、俗解の域を脱せぬ幼稚なものであつた。学術的な語源学の成立したのは、印欧語族の各国語や、ヨーロッパの各方言が比較研究されるやうになつた十八世紀からのものである。今日、西欧語に関するかぎりでは、牽強附会の俗解はほとんど影をひそめて、重要語の各々について、信憑度の高い語源解が立つてゐる。

日本では、それとかなり事情を異にし、重要な語のそれぞれについて語源上の定説が立つには、まだ程遠い。早くに悉曇学の影響の下に、五十音図が創られ、近世には、五十音図の一々の行、または一々の音に独自の義ありとする意義説の語源論が発生したが、その説く内容には、俗解がかなり多いと認めざるを得ぬやうである。さもあらうと首肯されるものについても、さらに学術的な裏打ちを必要とすであらう。

学術的な語源説は、第一に、言語学一般の上から認められる法則に従つたものである上に、類例によつて支へられるものでなくてはならない。そのためには、漢字や印欧語との比較をも経るのが望ましいであらう。それは人間の思考と表現には、人性の同一といふ普遍的立場が反映するからである。(ただし異系の言語間における思考と表現の暗合は、単なる

参考例を提供するにとどまる。) 第二に、日本語の特殊性の上からは、日本語に特有な音韻の歴史的研究(例へば橋本進吉博士によつて顕揚された上代特殊仮名遣)の規準に合ふものでなくてはならない。この立場から、従来の素朴な音義解は一々批判し直さるべきであらう。

ただし音義説による語源解は、これを全面的に否定し去ることはできない。一々の音声に独得の意義を認めることは、それが写声的起源の語詞であるときは、十分に理のあることであるし、さなくとも、純日本語のかなり多くが、情感を表はす単一の発声を根幹として、一群づつ、いはば文字通りの「言の葉」をつけた幾つかの樹木のやうに成立してゐることは、日本語の顕著な特質であるからである。

上に「言の葉」といふ語を修辭的な意味で使つたが、「言の葉」は學術的語源論からは「言の端」の義で、「言に出づ」とか「言のはに出づ」などの表現の示すやうに、言の、端(中心に対する辺、表面)に出でたるもの、すなはち言による表現の意であらう。(「コトノハ」を万葉集の東国語形で「コトノへ」といふのも「言の辺」の義か。「端」と「辺」とは同系の語と考へられる。)

因みに、日本語の「事」が「言」と同言であるといふことについて一言する。和訓葉の「事」と言と訓同じ、相須つて用をなせば也」の説明では、両者の一致することが十分には腑におちない。この場合には、むしろ哲学の現象学(Phänomenologie)の思考を用ゐて、日本語の事は、もと云々、と言ふことの義であると解すれば、両者の一致が判然としよう。すなはち邦語の「事」は、意識から切り離された抽象的存在としての事ではなく、意識現象における対格的契機、すなはちノエマの性格において捉へられてゐる事なのである。

音義説の基調に立つ業績として、たとへば賀茂百樹の『日本語源』は、右のやうな言の葉をつけた樹木を林立せしめて示す。そこには、広く東西の語学を学んだ者の語学的センスからは首を傾げざるを得ぬものも、いくらか見えてはをるが、さこそと思はれる珠玉の着想が、それ以上多く含まれてゐる。その事は、松村任三の『語源類解』や、大島正健の

『国語の語根とその分類』などについても言へるであらう。この人々の業績は、新しい科学的国語学の人士による琢磨を待つ璞を、かずかず蔵してゐるのである。

上記の日本語源や、大槻文彦の大言海、最新の学術的業績たる時代別国語辞典の上代篇などを、とりあへず踏み台として用ゐて、「目」の世界に足を踏み入れてみる。

## マ

マ(目) 目の交替形である。「目の辺り」などの連語を除いては、単独に用ゐられることがなく、おもに複合語の接頭語となる。マナコ「目之子」、マツゲ「目つ毛」、マドロム「目蕩ム」など。これらの例では語の構成要素が比較的事立つて意識されるが、「前」が「目方(辺)」であることなどは、語源学の知識に属するであらう。マへは「足跡(後)辺」や「尻方」の対である。

求める意の古言マ(覓・求)グも、目の活用(目して尋ねる義)であると考へられる。万葉集四四六五「山河を岩根さくみて踏み通り国マギしつ」

マネ(招)クは、「見ス」「召す」などと思ひ合はせれば、「見願(祈)ク」ではなからうか(私見)。大言海は「前祈ク」の略か。又は迎へ願クの略か」と記してゐる。(因みに、マへもムカフも目から生じてゐる。)

マキ(参)ル 安藤正次氏は接頭語マ+キ(居)ルの構造の語と説く由であるが(阪倉篤義『語構成の研究』四二〇ページ)、賀茂百樹に従つてこのマを目と解するのは、べつに支障がないであらう。参ルがマキ+入ルの約であることは、ハヒルがハヒ+入ルであるのと同趣である。同じく、マキ+出ツはマキツとなる。さてそのマキは明らかに連用形である故、その終止形として上二段活用のマウの存在が考へられる(時代別国語辞典上代篇)。

参ルは、尊貴な人や所に参入することを表はす。詣ヅは参出ツの音便約である。マキルは物にも転用されて、人に物を

呈する、進めることをマキラスといふ。マキルを、食ふ・飲む・着る・用ゐるなどの敬語として他動詞に用ゐるのは、マキラスの語義に対応して、後に展開したものであらう。

呈する・進める意の英語 **プレゼンツ** は、邦語マキラスにびつたり照応する語意の語である。 **present** の元はラテン語 **prae-sentare** で、その原義は「前に在らせる」である。マキラスも「目方に居らせる」にはかならなう。

備考。「居ル」「居ル」は今人はある場所に存する意にのみ用ゐられるが、古くは物の所在についても用ゐられた。たとへば井は「居所」であつて、今日の掘抜井戸とはちがひ、もと小川のある個所の底を掘り、水を居させたのが起原である(国語学辞典中、金田一京助氏の稿)。

※ 因みに言ふ。この例は、語源論が民俗学とも密接に手を携へて進められなくてはならぬことを示すものである。

マキラスの語義を表はすものに、べつに **マヲ** (申) **ス** (転じて、**マウス**) といふ語がある。これも、むしろ「申居ス」の義であらう。その義は今日も補助動詞の用法に残る。狂言記「お茶なりと申サウ(参らせう)ものを」それが後に「告げマウス」の意に限定されて、「申す」の今日の意味となつたのである。

今日われわれの常用する助動詞 **マス** は、「申ス」の転とも、マキラス→マラスル→マッスル→マッス→マスと転じた語とも云はれるが、両者の根源であるマヲとマキとは、共に「目居」であつて、結局は一に帰する。

参ルの対は **マカ** (罷) **ル** であり、それは「目離ル」の義と解かれるが、筆者はそれに対して疑問をもつものである。それは、罷ルが他動詞マ(任・罷)クに対する自動詞であることは、焼クに対する焼カルに類すること、またマカルの古い用法には「遣はされる」といふやうな受動の語意が濃厚であることを考へて、マカルの元にマク(任を与へて去らせる、赴任させる)が考へられねばならぬからである。そのマクは、賀茂百樹が一つの推測として提出したやうに、むしろ任(マにマに)のマの活用ではあるまいか。万葉集には「大君の任のマにマに」といふ語句が幾つも見えてゐる。このマクから今日の任スが生ずるのである。

ミ(見)ル。明らかに目の活用で、<sup>ミ</sup>「目ル」の義であらう。(メ・ミ交替音)。

漢字「<sup>けん</sup>見」は、説文に「<sup>ル</sup>見(あし)と目の会意」と説くが、『文字系』に従つて、人の上に目のある象意と解するはうが妥当である。

欧語 *sehen* (to see) は、ラテン語 *sequi* “追ふ”と同根で、恐らく古代の狩猟語が基になつてゐるものと解せられてゐる。同根のレツテン語 *sekt* は“追ふ・嗅ぎつける”の意である故、邦語の「<sup>ミト</sup>認ム」(「<sup>ミト</sup>見尋ム」)に似た原義から「見る」の義が発生したものと考へられる。獣の跡を認める意から、示す・告げる義を展開し、それが *sagen, to say* 「言ふ」なる動詞を生ずる。*sagen* の原義は「示す」である。

※ このやうに、欧語の重要なものが狩猟生活に關して成立してゐることは、語源論が人類の生活史と密接な關係に立つべきことを教へる。

見る作用は、対象との距離を最も大きく保ち、従つて対象に対して人間を優越せしめる知覚である。たとへば、音速は時速が約一二〇〇キロであるのに、光速は一秒間に、ほぼ地球から月にまで到達する。光による「見る」知覚は、人間の無限能力あるいは絶対性を反映せしめ、見ることは五官のうち最高等の感覚とされる。ここから「見る」は「知る」の義を展開し、人間の最優越の境地が「<sup>ミ</sup>見ル」に即して表現されることとなる。たとへばラテン語 *videre* (visum) に対応する同根のドイツ語 *wissen* は「知る」の義であり、同じく同根のギリシア語 *idein* “見る”は、*idea* なる名詞を派生して、「理想」の義を表はす(イデアがドイツ語に入つて *Idee* “理念”)。漢字「<sup>かく</sup>覚」が「見」を基幹とし、「目やめてゐる」意から高い意味の「さとり」に発展したことも、この類に入るであらう。「賢」を表はす欧語 *weise, wise* は、上述の *videre, wissen* と同系である。

欧語では、たとへばドイツ語の *sehen* が、前綴を附して *absehen, ansehen, aussehen, besehen, einsehen,*

versehen, vorsehen, zusehen 等々を派生せしめて、さまざまのニュアンスを表はすのに対応して、漢字では「目」なり「見」なりを構成要素とする数多の字を作製して、欧語とは比較にならぬほど微細なニュアンスを表現する。たとへば目からは「眺」相「瞥」省「矚」瞠「督」睨「瞻」睹「眷」瞰「瞻」瞋「看」真「真」など。また見からは「覚」視「覽」覓「覲」覲「覲」など。(日本語では意味の分化が極めて簡単であるので、上の漢字の大多数を、そのままに用ゐて、それらにひとしくミルの訓をつける。当用漢字ではミルの訓は「見」だけに限られるが、他の字を用ゐてそれをミルと訓むのは、文章の表現を豊かにするものであり、べつに遠慮すべきことではない。) これらの一々について細説する。ことは、今はその場でないが、右のうち語源的に興味のある「相」眷「真」覲の四字を取出して解説してみよう。

「相」は木と目との合意であり、盲人が木杖を以て目に代へる意といふ。ここから「時を相る」地を相す」などと、手探り見るやうな見方の意に用ゐるのである。相をアヒと訓じ、対の義に用ゐるのは、恐らく他字の仮借であらう(いま考証を省く)。相の直接の意味は、相ルである。

「眷」は卷の省画に当るものと目との合意、卷の声である。首をグルリとめぐらして見る。かへり見るの義。(邦語でも巻ク・回ル同統。)  
「眷族」は顧みてやらねばならぬ族である。

「真」の正字は「眞」であり、古文は 𠄎 である。七は人と同字であるが、尋常ならざる人を表はす故これを傾けて記す。(これに更に人扁を附すれば「化」となる。) 字の下の部分は台の象形であつて、 𠄎 の字は超越的な靈位(神)に對する尊崇の状を表はす。後に、その靈位に對する、といふ意を示すために、これに注目する意で、目を加へ、またその靈位がじつは目に見えぬものであることを表はさうとして「眞」の字が成つた(台の上部の横線と)の横線とが融合してゐる)。

以上三字の解説は華石斧の『文字系』(天津、一九三九年)による。説文では眞の字を、道家の真人(仙人)の考



に基づいて、仙人が形を変じて天に登る意、七シ（化ける）、目メ、「イ」（隠れる）、ハハ（乗載する所）と説くが、漢人の篆が下をみな下カに作ることを考慮して、華石斧が解釈し直したものである。東大の藤堂明保教授は、真の字の金石文を引用して、人の首を逆にした形と説く故、その解釈では、べつに目と関係はない。

因みに、藤堂博士が「単語家族」といふ新しい原理を掲げて、漢字の語源を体系的に追求するのは、学界の一業績であるが、かなりの強行を敢てしなければ、多くの漢字を音による基本義に割切ることとは不可能であると思はれる。たとへば「真」の本義を充填の義とし、填や顛をそれによつて説くとしても、進んで順や慎や鎮になると、しつくり腑に落ちかねるやうである。また「真」の字のみを取つて見るも、字形「ハ」の説明が藤堂説では附きやうがない。藤堂説では、ハの字を引いて証とするが、文字系に引かれた古文（爰父彝）ハを、どう取扱つたらよいか。筆者の感ずるところでは、説文解字が資料不足のために陥つてゐた誤を正し、音義の要素をも堅実に取入れ、吾々の語学センスに一ばん適ふ漢字の体系的解説を打出したものは、上記の華石斧『文字系』であるやうである。同書に對する専門家の検討を望む。

「クワン」正字は「クワン」扁は鶴ツル（コフ）の鳥が目を張つて立つ形（古文殷契 𠄎）で、クワンの聲（漢のクワンも邦語のコフも、鳴声の擬声）。「藤堂博士の『漢字語源辞典』にはこの字が収録されてゐない。」ツルにクワンに視る義であつて、ドイツ語の *anschauen, betrachten* のやうに、内面的に、また全体的見地から考察する意ともなる。たとへば *Lebensanschauung* ‘人生観’、*Weltanschauung* ‘世界観’、*Betrachtung* ‘観想’。宮本武蔵は『五輪書』に剣法の奥儀を語つて、「見の目」と「クワンの目」との相違を説いた。「見」は一通りの意味における「見る」である故、肉眼による識別ほどの境位を表はし、それに対して「クワン」をもつて、心眼によつて洞見する境位を示したのである。

△

向ク 大言海では身の活用と説くが、筆者は物集高世の『支言考』に従つて「目ク」と解する。「対フ」(四段活)と「迎フ」(ムカヘル) (下二段活)とは「向キアフ」の約である。「昔」は今に對へて過ぎ去つた時を云ふ(シは過去)。

※備考。「ドイツ語 Gegenwart も「対向」の義であるが、いま對し向ふ「現在」を意味する。それは谷川士清が解する「今」(イハ)は發語、マは目」の語義に對應する。

オモム(趣)クはむろん「面向く」である。向クが「目く」であるならば、それに実に面を冠して複合語とすることは、向クが目から生じたといふ語源が一般に忘れられるまでにこの動詞が確立した後のことであらう。

次は筆者の私見としての仮説であるが、カミ(上)とシモ(下)とは「上向」と「下向」とではあるまいか。ウへとシタとが個所を示す語であるのに対し、カミとシモとは方向を表はす語であるからである。カミはカムの交替形であつて、ミは上代仮名遣では甲類である。

この上に対し、カミ(神)は乙類であつて、別語とされるが、両語はなにも無縁の語と限つたわけではあるまい。大野晋氏に従つて、乙類の<sup>ミ</sup>が<sup>ニ</sup>から生じたとするならば、神は上にイの音が添加された合成語であるとも考へられる。そのイを筆者は「靈」が頭子音を失つた形とし、上靈なる原形を想定し、日本語からアイヌ語に移つたと言はれるカムイ・カモイを、上靈の音を純粹に近く伝へたものと考へたいのである。靈は甲類であるが、<sup>ミ</sup>となつた形が乙類の<sup>ニ</sup>となることは、音韻法則に照らして成立することであらう。この神の交替形カムは、接頭語的に動詞や名詞に附いて用ゐられる。「カムあがる」「カムおや」「カムながら」など。なほ「賀茂」も神の義である由である(大言海)。

ただし神を上靈とする仮説には難点が附きままとふことを筆者も知つてゐる。ヒの音は、奈良時代までは甲類が<sup>ニ</sup>乙類が<sup>ミ</sup>であり、平安時代中期以後に、語中と語尾で<sup>ニ</sup>に変わり、次にで<sup>ミ</sup>に變つた由であるが、神といふ乙類<sup>ミ</sup>をもつ語がすでに上代において蔽存してゐるのであるから、<sup>ニ</sup>がヒの頭子音を失つたイと結合して<sup>ミ</sup>イとなり<sup>ミ</sup>となること




は、時代的に成立し得ないやうでもある。この矛盾を筆者は国語の専門学者に解決してもらひたく思ふ。ただ筆者は、ヒト(人)を「<sup>ヒト</sup>霊足」とする賀茂百樹の説に惹かれ、

皇太神宮の御言に「人雖<sup>レ</sup>多請云々」また小彦名命のことを「有人声」火折命のことを「有人影」豊玉姫の歌に「比

とあるのに従つて、神を「<sup>カミ</sup>上霊」と考へたく思つたしだいである。

もし上述の仮説がどうしても成立しないとしたら、神はあるいは「<sup>カミ</sup>赫身」でもあらうか。または「<sup>カミ</sup>幽身」の義でもあらうか。

## メ

メ(目) マを交替形とする。漢字「<sup>メ</sup>目」は古文    で、むろんメの象形である。漢字「<sup>メ</sup>眼」は、目と良との会意、良の声であり、良の古字形は「見」と同じく、目と人とであるから、「目」がメの単なる象形であるのに対し、「眼」のはうは、目の見るハタラキを表はすものと解してよからう。欧語 Auge, eye, (ラテン) oculus は、「見る」の義の印欧語に属する同根の語で、「見るもの」の義である。

メ(看・見) スは看ス(見為)の転で、見ルの敬語である。聞コスと同じやうに、物を身に受け入れる意から転じて、食ふ・飲む・着るなどの敬語となり、さらに動詞の末に敬語としても添へられる。「聞こしメス」思しメス」知ろしメス」人を近づける意では召(徴)スと記される。

メグ(恵) ムは、賀茂百樹の解するやうに「<sup>メ</sup>目含ム」の義であらう。メ(愛) ズも目の活用である。メツ(珍) ラシは愛ラシ(ラは助詞として添加)、メデタシは愛痛(甚)シである。

※ 邦語イタシは「イタク悲しむ」などと、情感の切なる意、甚だしい意となる。ドイツ語 sehr も、versehren 「傷ける」、英語 sore 「傷いた、痛い」と同系で、イタクの意から、「甚だ」の意となる。

「時メク」春メク」などのメクは「見く」の義であらう(賀茂百樹)。大言海は「見来」を約して四段に活用する語と解してゐる。

モ

モト(求)ムは「目尋ム」の義であると考へる。村田春海は「本の活用也、モトは最所也」と説き、時代別国語辞典上代篇も同じ考を支持してゐるが、筆者には、賀茂百樹が運ブを「箱ブ」と解したやうな俗解気味が感ぜられる。

※ 因みに、ハコブは私見によれば「ハカどる」などのハカの活用で、「事がハコブ」などの自動の意が元であり、転じて「物をハコブ」意の他動に移つたものと思ふ。ドイツ語の fördern, befördern(「ハカどらせる、はこぶ」)が思ひ合はされる。

モ(守)ルを賀茂百樹に従つて「目ル」と解する。もと見張る番をする意である。(大言海が最の活用とするのは諾むがたい。)この原義が忘れられて、さらに目を附したマモ(守)ル「目守る」が生じ、さらにその意も忘れられて、見を冠した見守ルが生じたのであらう。このやうな例は、東西ともに乏しくない。

※ たとへばドイツ語 essen(食ふ)の過去分詞は、もつ gessen(Ge-essen)であるが、そこに Ge- が既に入つてゐること が語感から失はれて、改めて Ge-を附した gegessen が生じたときである。上に挙げた「眼」の字において、旁の良のなかに既に「目」が入つてゐるのに、改めて目を扁とし、結局一つの字に「目」が二つ含まれる字を生じたときも、この類に入る。

時代が移り語詞の実体が変化しても、ある国語の傾向や形式は同一性を保つものである。たとへば上述の「参ル」<sup>マキ</sup>「参ラス」が、「お目にかかる・お目にかける」といふ原義であることが忘れられると、「参ラス」の代りに新たに「見え参らす」といふやうな語詞が生じ、それを元に「見参ニ入ル」など、漢字を用ゐた日本の表現が成立したりする。「参ル」は「目居入る」である故、「見参ニ入ル」といふ語には、目なり見ルなりが二重に含まれ、「入ル」も二つ重ねられることになる。「見守ル」などは、これを復元すれば「見目目ル」となるであらう。